

グレン・レイ氏コンサート

聞き手 ライアン・モリソン

六月二十八日、世界教養学科主催による特別コンサートが行われ、現在日本で東京を拠点に活動するアメリカ出身の黒人ミュージシャン、グレン M. レイが学生たちを前に素晴らしいライブを披露した。サイモン & ガーファンクル、ジェームス・ブラウン、クール&ザ・ギャング、リック・マーティン、ザ・ジェッツ、コモドアーズなど、学生たちにとってはオールディーズとも言えるナンバーが主だったにもかかわらず、会場となったコミュニケーションプラザは大いに盛り上がった。翌日彼はインタビューに応じてくれ、その音楽的経歴や若い学生へのメッセージなどを熱く語ってくれた。

ミュージシャンとしての始まりと経歴

レイ氏の音楽への入り口はジャズである。中学時代にジャズバンドに入り、サックスを習い始めた。楽譜を読むこともできたが、ほとんどは、直感と耳を頼りに曲を次々と覚えていったと言う。ジャズに没頭しているうち、モータウンの音楽が流行り始め、それによってレイ氏の「人生が変わった」と言う。モータウンとは、音楽プロデューサー、

ベリー・ゴードイがミシガン州デトロイトで立ち上げたレコードレーベルであり、その名は自動車産業の街 Motor Town にちなんでいる。ステイター・ヴィー・ワンダー、ジャクソン5などを輩出したことで日本でもよく知られている。レイ氏はアラバマ州出身だが、当時デトロイトに移り住んでおり、まさに本場の地でモータウンの音楽が流れるクラブに通い始め、ジャズにどっぷり漬かっていた生活が一転、モータウン狂いの日々が始まった。

十七歳から四十二歳までは、高校の仲間とともに形成したバンドで演奏していた。メンバーは当初の十三人から六人に減り、バンド名も何度か変わったが、二十五年にわたり主に Images という名で、アラバマ州とテキサス州、つまりアメリカ西南部を中心に活動していた。高校や大学の依頼を受けて学生たちの前で演奏することもあれば、近くから銃声の聞こえてくるような街のクラブで演奏することもあった。一方で、コモドアーズを始めとするモータウンの有名バンドのライブのオープニング・アクト（前座）を務めることもあった。

八〇年代になると、時代の影響を受けてレイ氏の音楽も変化を見せる。ヒップホップが誕生したからである。モータウンはメロディや音の調和、ハーモニー、コード進行などが特徴であり、やはりそれを好んだレイ氏だが、ヒップホップのリス



グレン・M・レイ氏とライアン・モリソン氏

ムの影響も確実に受けていった。そして四十二歳からは、*Sham* というバンドでカナダのバンクーバーを中心に活動を始める。

モータウンにおける

政治性と現在のアメリカの状況

実際にモータウンのミュージシャン達と共演も行ったレイ氏の視点から、モータウンの音楽について振り返ってもらった。モータウンは当初、もっぱら商業的な音楽を発信しており、ラフソングなどが多かった。しかし、マーヴィン・ゲイの曲「ホワッツ・ゴイン・オン」(“What’s Going On?”)をきっかけに、方向を転換することになる。この曲と同様、人種問題、黒人・マイノリティに対する警察の抑圧、ベトナム戦争反対運動など、当時アメリカで実際に起きていた問題を歌詞に反映する曲が次々と発表されるようになった。中でも「ホワッツ・ゴイン・オン」は、現在でも名曲として人気があり、モータウンの転換点となった曲である。

しかし、最初にマーヴィン・ゲイがこの曲を発表しようとしたとき、モータウンの創業者であり依然として有力な音楽プロデューサーであったベリー・ゴードイは、モータウンはセンチメンタルな曲を発信するのがスタイルであり、現実を生々しく映し出した曲は合わないので採用しないと断った。それに対しマーヴィン・ゲイは、この曲が認められないならモータウンから抜けると言い張ったので、それを避けるために発表されることになった。するとこの曲によって、歌詞やメッセージの方向性が変わり、モータウンの音楽の深みも増すことになる。ゴードイが反対した理由には、歌詞の内容だけでなく、音楽的にもこれまでのモータウンとは違うということもある。しかしいざ発表すると大ヒットしたのだ。したがってモータウンの歴史を見る場合、「ホワッツ・ゴイン・オン」以前と以後を分けるとわかりやすい。後期の代表曲としてはエドウィ

ン・スターの「黒い戦争」(“War”)が挙げられる。ベトナム戦争だけでなく、ありとあらゆる戦争を否定する曲である。

レイ氏に、モータウンの音楽が歴史を変えたのか、と質問すると、彼は、変えたと言える、と答えた。歌に共鳴した若者たちの抗議活動によりベトナム戦争は終結へと向かった。また人種問題や貧困などの社会問題に対する多くの人々の意識を高めることにも貢献した。もちろん、モータウンの音楽はある程度の影響を及ぼしはしたが、アメリカ、そして世界を完璧なものにしたわけではない。それでもレイ氏は音楽は世界を変えることができる、と信じている。トランプ時代の始まったアメリカを見てみると、白人至上主義者達による暴拳の数々は目に余るものであり、モータウンの時代からむしろ歴史が逆戻りしているかのようである。トランプ大統領は“Make America great again”を目標に掲げているが、誰にとつての *great* なのが問題である。黒人にとって、五〇年代のアメリカは決して *great* などではなかった、とレイ氏は繰り返し指摘する。

「ホワッツ・ゴイン・オン」以降のモータウン音楽の代表とも言えるのが、ジェームス・ブラウンである。彼は、レイ氏に言わせると、キング牧師ほどのカリスマ性を持っており、ファンの強い信頼を受けていた。社会問題などについて発言することもあったが、彼がライブで呼びかけると、聴衆はその通りに行動するような、強烈なカリスマ性の持ち主だった。その扇動者のようなところを恐れ彼の立ち入りを禁止する州もあったほどである。レイ氏は、その頃のジェームス・ブラウンのライブで演奏をしたことも何度かあったそうだ。ブラウンは非常に優しい人間で、自分も含め多くのバンドのメンバーや周囲の人々に多くの人生のアドバイスを行っていた。彼が言った「誰にも負けるな」、「決して権力者たちに屈服するなかれ」という言葉は今でも忘れないう。

自身の音楽への道

レイ氏は、ミュージシャンであるだけでなく、自分のプロデュースをするビジネスマンでもある。スケジュールや会計の管理、宣伝活動なども自分で手掛けている。実際には、それらの業務が忙しく、ミュージシャンとして練習、演奏などをする時間と、ビジネスマンとして働く時間は半々のようだ。

彼は十九年前から東京に暮らしており、主に東京のジャズバーやクラブなどで演奏している。主にはソロであるが、時にはピアノなどの楽器と共演することもあり、仕事の依頼は年々増えてきている。東京暮らしがとてもし気に入っていて、アメリカに一時帰国しても、早く東京に戻りたいと思う程である。NUFSでの演奏中、素晴らしいダンスも披露してくれたが、本人曰く、レッスンも受けておらずむしろ下手なほうで、音楽のリズムに合わせて即興で動いているだけだと謙遜していた。

学生たちへのアドバイス

ブラック企業なども問題になっている今、普通に就職して会社のために生きていく将来を思うと暗い気持ちに陥りそうな若者への助言を聞いてみた。レイ氏は、会社などに就職しても、できるだけ貯金をし、ある程度の年齢からは自分自身のビジネスを始めるべきだと言う。とにかく貯金をし、それをもとにいずれはビジネスマンになることを勧める。自分が働きたい分野、やりたいこと、を一刻も早く見つけること、そしてその分野を、独学によってマスターすること。必要に応じて普通の仕事をして生活を維持しつつ、自分の本当にやりたいことをしながら生きていく準備をしていくこと。それがレイ氏のしてきたことであり、同じように今の若者にも自分の努力で堅実に進んでいって欲しいという答えが返ってきた。



当日の会場の様子



演奏中のレイ氏